

ODU

大阪歯科大学広報

NEWS

No. 170

Mar. 2014

OSAKA
DENTAL
UNIVERSITY



平成25年度
大阪歯科大学卒業式
大学院学位認証式

大阪歯科大学
大学卒業証書授与式
大学院修了者学位認証式



02	平成 25 年度 大阪歯科大学卒業式	14	平成 25 年度 解剖体遺骨返還式
02	学長告辞 学 長 川添 堯彬	14	第 21 回 公開講座(枚方講座)開催
02	理事長式辞 理 事 長 川添 堯彬	14	第 9 回 附属病院 歯科医師臨床研修 指導歯科医講習会
03	祝辞 同窓会会長 三谷 卓	14	平成 26 年 歯科医師臨床研修 情報交換会
05	学位・博士(歯学)授与報告	15	第 11 回 大阪歯科大学附属病院 病診連携講演会・懇談会
06	平成 25 年度 専門学校卒業式	15	平成 26 年度 歯科医師臨床研修 協力型臨床研修施設による施設紹介・面談会
06	平成 26 年度 一般入試合格発表	15	平成 25 年度 歯科医師臨床研修 研修歯科医症例報告会
06	第 107 回 歯科医師国家試験結果	15	平成 25 年度 歯科医師臨床研修 研修歯科医修了証授与式
07	平成 25 年度 定年退職者	16	平成 26 年度 診療報酬改定に伴う講習会
07	定年退職ご挨拶 「私の青春時代を顧みて」 林 宏行 「定年退職のご挨拶」 宮本 美千子 「定年退職ご挨拶」 野中 登貴男	16	平成 26 年 新年互礼会
09	教授就任	16	年頭所感 理事長・学長 川添 堯彬
09	教授就任ご挨拶 ・ 歯科審美学室 末瀬 一彦 ・ 総合診療・診断科 小出 武	21	平成 26 年度 事業計画
13	平成 25 年度 学生短期海外研修派遣 ・ 北京大学口腔医学院 ・ シドニー大学歯学部 ・ コロンビア大学歯学部	23	寄贈
		24	人事
		25	あとがき

Wishing you a bright future...

*Congratulations
on your Graduation!*



平成25年度 大阪歯科大学卒業式

平成25年度大阪歯科大学卒業式ならびに大学院学位認証式が、平成26年3月7日（金）に執り行われました。

川添 堯彬 理事長・学長から第62回大学卒業生一人ひとりに卒業証書・学位記が授与され、また、第50回大学院修了者にはそれぞれの指導教授から博士（歯学）の学位記が授与されました。これから各々の道に羽ばたいてゆく卒業生に、理事長・学長よりお祝いと激励の言葉が述べられました。お天気も良く、式終了後は、恩師や後輩と記念写真を撮ったり、胴上げされたり、とても和やかな旅立ちのひと時となりました。

学長告辞

学長 川添 堯彬



東大寺二月堂のお水取りの行事は、今月初めから始まり昨日の3月6日の啓蟄を過ぎてもお続いております。来週の15日の土曜日にいよいよ満行日を迎えます。周辺の梅林も今満開で、春の到来がすぐそこに感じられるこの頃でございます。春は物事の始まりであり、夢や希望の実現を感じさせるものでもあります。

本日、まさにこの春の近いよき日に、第62回大阪歯科大学卒業式を迎えられます94名の新歯学士諸君並びに第50回大学院学位認証式を迎えられる24名の新博士の皆さん、本日は誠にありがとうございます。同時に、本席にご臨席いただきました保護者・ご家族の皆様におかれましても、ひとしおの感慨に胸を膨らませておられることと拝察いたします。

さて、新歯学士の皆さんに申したいと思います。皆さんは間もなく国家試験に見事に合格されて歯科医師になられるわけですが、これからさらに国で決められた1年間の臨床研修で研鑽する義務があります。その後は社会人歯科医師

として、各分野に分かれて活躍していただくこととなります。それぞれに使命感や、やりがいを見つけてくれるものと思えます。

皆さんはこれから社会に出られて、第一には歯科医師、DDSとしての必要な三要素、すなわち Science, Art & Heart、すなわち歯科医療技術を磨くとともに、Heartの提供を十分に発揮していただきたいとの思いであります。このHeartは思いやりの心であります。歯科医師には特にこの点が重要だと思われまふ。奉仕の精神や博愛の心にも通じるものがあります。

第二の目標は、交友もこれからはできるだけ海外諸国に目を向けてほしいことでもあります。それは自己啓発にもなりますし、また視野の拡大にも有益であります。あるいは将来の私たちの活躍の場もグローバル世界に見い出せるかもしれません。

そして第三の目標は、従来よりもっと患者さんに喜んでもらえるような歯科医を模索・探索し、実行してほしいであります。できるだけ多くの人々から「ありがとうございます」という言葉をたくさん言ってもらえる、そんな歯科医師になってほしいと思います。

次に、めでたく大学院を修了された新博士の皆さんへ申したいと思います。歯学部を卒業後、さらに上級のコースを進まれ、勉学意欲、研究意欲に燃えて、ここまでの苦労や努力に耐えてこられて、このたび見事に博士の学位を授与されました。このご苦労の成果を、皆さんのこれからの各自の職業人生や、あるいは研究人生においてさらに磨いていただき、

各分野の歯科界のトップランナーになっていただきたく、存分に活躍していただくことを祈念いたします。

そしてさらに期待したいことは、皆さん方は恵まれて、また幾多の努力を経てここまで進んでこられた、まさに宝となるエリート人材でございます。できましたらお一人でも多くの方が大学に残っていただき、大阪歯科大学の教員人材の要（かなめ）になっていただきたい思いでございます。そしてそれによって、大学の力を一段と高めていただきたいと念願いたしております。

以上、新歯学士と新博士の皆さんへの学長告辞といたします。

理事長式辞

理事長 川添 堯彬

このよき日に第62回大阪歯科大学卒業式を迎えられます94名の学部学生の皆さん、並びに第50回大学院学位認証式を迎えられました24名の皆さん、本日は誠にありがとうございます。同時に、本席にご臨席賜りましたご家族・保護者の皆様方におかれましても、さぞや安堵の思いでおられることと拝察いたします。

さて、まず学部卒業生の皆さんに申したいと思います。皆さんは間もなく国家試験に合格されて歯科医師となられるわけですが、さらに1年間の臨床研修を積まなければ一人前にはなれません。私はここで、卒業生の皆さんに社会へ出てから目標とする歯科医師像について、こんな歯科医師になってほしいとい

う願いを申したいと思います。それは具体的に、三つあります。

一つ目は、患者さんに感動してもらえ、それを喜びと思える歯科医師であります。患者さんは歯科医療において、安全・安心の治療を何よりも望んでいるからであります。

二つ目は、患者さんから、一旦治療が終わりましてもまた再びこの先生にかかりたい、診てもらいたいと思ってもらえるような歯科医師であります。これも信頼確保であり、社会貢献につながるものと思われまます。

そして三つ目は、職業として、歯科医師になって本当によかったと思える歯科医師であります。これも本学の建学の精神にかなったことであり、ご父兄・保護者にとって、また本学の教員としても最も嬉しいことであり、切なる願いであります。

どうかこの三つをこれからの目標として、Science, Art & Heart を磨いていただきたいと思ひます。

一方、大学院博士課程を修了された皆さん方は、それぞれが専攻講座指導教授のもとでの研鑽に努められ、専門分野での知識をより深められたことと思ひ

ます。しかし単に学位を取得したことに満足せず、得られた知識と専門分野での研究成果をこれまでの歯科医療分野に反映させていただきたく切望してやみません。そのことが、この4年間お世話になりました大学や情熱あふれる研究指導をいただいた指導教授、並びに貴重な提言をいただいたインストラクターをはじめ、先輩教員の方々、その協力を惜しまなかった講座員への恩返しにもつながると思うわけであります。今年度の大学院修了者で、さらに大学や病院に残られる方は、各部署で重要な職責を担うことになると思ひます。まさに社会貢献でございます。

さらに私は、理事長として、新学士並びに新博士の両方に申し上げたい。皆さん方は、100周年を迎えた本学の卒業生であることを、銘々の心に刻んでほしいのであります。100年の長きにわたって社会に奉仕し、貢献してきた先輩たちが築いてきた誇りを、あなた方若い方も持ってほしいと思うのであります。そうすれば一同の胸中に、未来へ向けての新たな誓いが生まれるものと確信します。

既に過ぎました2011年11月11日には、盛大に100周年記念式典が挙行され

ました。そしてこの式典を含む七つの記念行事は、昨年3月に100周年記念館が竣工したのを含めて、すべて完了しました。まさにこのときに、100年に一度の非常に貴重なこのときにこそ、君たちが卒業し、私たち教職員が生きていられたという僥倖を思わずにはられません。皆さん方もこぞって未来に向けての新たな誓いを今日、今この瞬間に胸に刻んでいただきたいと切願、切望いたします。

以上のお願いを申し上げて、理事長式辞といたします。

祝辞

同窓会会長 三谷 卓

ただ今、諸君は学長から本学の卒業証書を授与され目出度く歯学士となられました。歯科医学生としての最高学府の教育を習得するために研鑽努力され、その成果がここに結実しました。先輩の全国同窓会として、この慶祝に満腔の拍手を送り、衷心よりお祝い致します。誠におめでとうございます。

ご両親、ご父兄におかれましては、入学以来今日まで、いやそれ以上の長い歳





月に亘って、ご子弟の教育と成長を支えてこられました。今日のこの式典に出席され万感の思いでおられる事と思います。改めてそのご苦勞に深甚なる敬意を表すところです。

卒業生の諸君はこの6年間青雲の志を持って春秋に富む貴重な歳月を螢雪に励み、専門知識と技術の習得、更に心身の育成や文化的な活動も体験し、今日この晴れの舞台に立って大きな達成感を感じていることでしょう。

人は20歳台前半に身体的成長が完成されますが、総合的な思考力、精神的、社会的な成長はこれからの10年が大切であると言われています。歯科医として尊敬される医療人であるために、更にこれからの数年間は自分の意志で、進路を選択し研鑽しなければなりません。自然

科学に加えて、社会科学の分野を体験的に身につけることとなります。目標への達成の意志は苦難を越えてしっかりと継続してください。その努力は必ず達成できます。

その時、人生航路での苦勞を分かち合うものは、今日ここに席を共にしてきた同級生であります。生涯互いに同じ天職を持つこの仲間こそ諸君にとってかけがえのない友達となります。友情は人生にとって極めて貴重な財産であります。今夜の謝恩会は友情の出発点となるでしょう。

さて諸君は卒業と同時に同窓会の一員になりました。諸君は晴れて大歯62回生と呼ばれます。と同時に、大歯出身者としての誇りと責任を負うことになります。名誉を共有していくこととなります。

諸君の在学中に、我々同窓会員は大学創立100周年記念を体験しましたが、それを通して得た大きな成果は、卒業生として大学への思いを新たにしましたことあります。人は他者を愛する心、大切にすることがあって人間としての本当の豊かさを得る、と云いますが、母校への思いもこれに似たところがあります。我々にとって大歯魂は歯科医師としての誇りを

支えるものであります。これからも校歌の‘清澄雲に映る’は何回も歌うでしょうが、大歯に学んだ者への生涯のメッセージでもあり、我々の青春そのものでもあります。

諸君は母校のかけがえのない大樹の一員であります。一方、同級の友達とは今日を暫くの別れになる者もいるでしょう。自分たちのクラス会を、連帯感をもって育ててください。もう一度言いますと、どんな困難があっても互いに励ましあってください。

後になりましたが、博士(歯学)の学位授与を受けられた皆さん、素晴らしい研究成果を得られ、誠にめでたうございます。

それは或るときには厳しい試練であったでしょうが、同時に自らの成長を得るものでもあります。歯科医学の研究は口腔という複合的な環境下で in vitro (インビトロ) な成果が出し難い中で、立派な結果を示されたことは素晴らしい事と思います。皆さんの継続した歯科医学へのリサーチを通して指導者として、大学の研究力向上に今後も貢献してください。

最後になりましたが、卒業生、大学院修了者の皆さんの幸運と健康を、心から願って同窓会よりの祝辞といたします。



■ 学位・博士（歯学）授与報告

守下 綾香 甲第 716 号 平成 26 年 3 月 7 日

Morphological study of the submandibular gland in the type 2 diabetes mellitus model rat (2 型糖尿病モデルラットにおける顎下腺の形態学的研究)

渡辺 昌広 甲第 717 号 平成 26 年 3 月 7 日

SOX4 expression is closely associated with differentiation and lymph node metastasis in oral squamous cell carcinoma (口腔扁平上皮癌における SOX4 の発現と分化およびリンパ節転移に関する解析)

小正 玲子 甲第 718 号 平成 26 年 3 月 7 日

Effects of Rac1 on the Production of MMP-3 by TNF- α (TNF- α 刺激による MMP-3 産生におよぼす Rac1 の影響)

越沼 静 甲第 719 号 平成 26 年 3 月 7 日

Combination of necroptosis and apoptosis inhibition enhances cardioprotection against myocardial ischemia-reperfusion injury (ネクロプトーシス、アポトーシス阻害の組み合わせは心筋虚血再灌流障害に対する心保護効果を増強する)

小野 高尚 甲第 720 号 平成 26 年 3 月 7 日

Histological Reaction to Porous Coral and Ceramic Bone (多孔性サンゴおよび人工焼成骨に対する組織反応)

上平 真代 甲第 721 号 平成 26 年 3 月 7 日

Preparation and characterization of low-crystallized hydroxyapatite nanoporous plates and granules (ナノ多孔質構造をもつハイドロキシアパタイト顆粒の作製と評価)

坂本 章人 甲第 722 号 平成 26 年 3 月 7 日

The utility of human dedifferentiated fat cells in bone tissue engineering in vitro (in vitro 骨組織工学におけるヒト由来脱分化脂肪細胞の有用性)

藤原 敬子 甲第 723 号 平成 26 年 3 月 7 日

A novel strategy for preparing nanoporous biphasic calcium phosphate of controlled composition via a modified nanoparticle-assembly method (改良ナノ粒子集積法により組成を制御した二相性リン酸カルシウムナノ多孔質体の新規な製作方法)

河野 多香子 甲第 724 号 平成 26 年 3 月 7 日

Chemopreventive effect of green tea catechin on rat tongue carcinogenesis induced by 4-nitroquinoline 1-oxide (4NQO 誘発ラット舌癌に対する緑茶カテキンの化学的予防効果)

姫嶋 皓大 甲第 725 号 平成 26 年 3 月 7 日

Occlusal Contact and Muscle Activity during Judo (柔道競技中の咬合接触状態および筋活動に関する研究)

黄地 智子 甲第 726 号 平成 26 年 3 月 7 日

Study on Experimental LED Curing Light Unit (試作 LED 光照射器に関する研究)

横田 啓太 甲第 727 号 平成 26 年 3 月 7 日

Study on Dental Hard Tissue Ablation by Er : YAG Laser (Er : YAG レーザーによる歯質切削に関する研究)

藤井 隆晶 甲第 728 号 平成 26 年 3 月 7 日

Influence of the bite impression technique on reproducibility of occlusal contacts in working casts for dental implants (咬合印象法がインプラント作業模型上の咬合接触再現性に与える影響について)

藤野 智子 甲第 729 号 平成 26 年 3 月 7 日

Cell Differentiation on Nanoscale Features of a Titanium Surface : Effects of Deposition Time in NaOH Solution (水酸化ナトリウム溶液への浸漬時間変化がナノ構造を析出させたチタン表面上の細胞分化に与える影響について)

松田 有之 甲第 730 号 平成 26 年 3 月 7 日

Study on Rehardening of Demineralized Dentin with Pulp-capping Agents Using a New Hardness Determination System (新規 Knoop 硬さ測定システムによる覆髄剤の有効性の検討)

林 亜紀子 甲第 731 号 平成 26 年 3 月 7 日

Analysis of Occlusal Contacts on Dental Casts in the Intercuspal Position - Comparison between Dual-arch and Conventional Impressions -(歯列模型上での咬頭嵌合位における咬合接触の分析 - 咬合印象法と通法との比較 -)

高橋 幸達 甲第 732 号 平成 26 年 3 月 7 日

Effect of Emdogain® - derived Oligopeptides on Human Microvascular Endothelial Cells in vitro (ヒト微小血管内皮細胞に対するエムドゲイン® 由来合成ペプチドの影響)

林 寛 甲第 733 号 平成 26 年 3 月 7 日

Effect of VCAM-1 on the differentiation into osteoclast (破骨細胞分化に及ぼす VCAM-1 の影響)

金村 優吾 甲第 734 号 平成 26 年 3 月 7 日

In vivo behavior of surface-modified titanium implants after chemical processing at room temperature (室温化学合成法で表面処理された純チタンインプラントの in vivo レベルでの挙動評価)

金銅 真世 甲第 735 号 平成 26 年 3 月 7 日

Celecoxib down-regulates mechanically induced ADAMTS-4 gene expression in 3D cultured tissue of human synovium-derived cells at lower concentration than indomethacin (セレコキシブはヒト滑膜三次元培養組織への機械刺激により発現上昇した ADAMTS-4 遺伝子をインドメタシンより低濃度で抑制する)

藤井 智子 甲第 736 号 平成 26 年 3 月 7 日

Effect of temporomandibular joint sensory receptors on functional jaw movements following intra-articular anesthesia during gum-chewing (ガム咀嚼時の下顎運動に及ぼす顎関節感覚遮断の影響)

中野 蓉子 甲第 737 号 平成 26 年 3 月 7 日

Rat Endothelial Cell Attachment, Behavior and Gene Expression on NaOH-treated Titanium Surfaces (水酸化ナトリウム水溶液によりチタン表面に析出したナノ構造がラット血管内皮細胞の初期接着および遺伝子発現に与える影響について)

嘉藤 弘仁 甲第 739 号 平成 26 年 3 月 7 日

Porphyromonas gingivalis LPS inhibits osteoblastic differentiation and promotes pro-inflammatory cytokine production in human periodontal ligament stem cells (Porphyromonas gingivalis LPS によるヒト歯根膜幹細胞の骨芽細胞分化能の阻害と炎症性サイトカインの産生)

新原 拓也 甲第 738 号 平成 26 年 3 月 7 日

Influence of chlorine dioxide on the physical properties of denture base materials(二酸化塩素が義歯床用材料の物性に与える影響)

以上 24 名

■ 平成 25 年度 専門学校卒業式

3 月 11 日、歯科技工士ならびに歯科衛生士専門学校の卒業式が行われました。当日はたくさんの来賓にご出席いただき、歯科技工士学科 16 名、歯科技工士専攻科 3 名、歯科衛生士学科 49 名が医療の世界へと新たな一歩を踏み出しました。

末瀬一彦校長から一人ひとりに卒業証書が手渡され、卒業生のたゆまないひたむきな努力に対する敬意と、それを支えてこられたご父兄へお祝いの言葉が述べられました。

校長告辞では、社会のなかで自分の位置や居場所、役割を知ろうとすることの大切さ、自分自身が機能していると実感することがそのままやりがいにつながることに、それらがプロフェッショナルの素養だということが述べられ、卒業後も医療人としての知識と技術をより深く研鑽していくこと、超一流のプロフェッショナルを目指すこと、心身ともに健やかに、プライドと自信をもってそれぞれの分野で活躍することが祈念されました。



■ 平成 26 年度 一般入試合格発表

平成 26 年度一般入学試験は、前期が平成 26 年 1 月 25 日(土)に、後期が 3 月 8 日(土)に実施されました。志願者数・受験者数・合格者数は右表のとおりです。

	一般入試 [前期]	一般入試 [後期]	一般入試 [合計]
志願者数	190 名	67 名	257 名
受験者数	186 名	56 名	242 名
合格者数	85 名	9 名	94 名
入学者数	※推薦入学者を含めて 128 名		

■ 第 107 回 歯科医師国家試験結果

平成 26 年 2 月 1 日(土)・2 日(日)の 2 日間、第 107 回歯科医師国家試験が、大阪では桃山学院大学にて行われました。3 月 18 日(火)に合格発表があり、本学学生・既卒者の合格状況は、右表のとおりです。

	新卒者	既卒者	合計
受験者数	94 名	64 名	158 名
合格者数	71 名	29 名	100 名
合格率	75.53%	45.31%	63.29%
全国平均	73.27%	39.94%	63.28%

平成25年度 定年退職者

右記の皆様が平成26年3月31日をもって定年退職されました。定年を迎えるにあたり、3名の方からお寄せいただいたご挨拶を掲載いたします。

口腔治療学講座	主任教授	林 宏行
総合診療・診断科	准教授	松本 晃一
口腔治療学講座	准教授	畠 銀一郎
歯科技工士専門学校	教務主任	松原 正治
専門学校事務室	事務長	西堤 京子
附属病院	歯科衛生士長	宮本 美千子
総務課人権担当	主任	野中 登貴男
附属病院	歯科技工士	菊田 茂

私の青春時代を顧みて

口腔治療学講座 林 宏行

平成26年3月31日をもって定年退職いたしました。昭和50年4月に助手に採用されてから退職までの39年の長き(私の青春時代)に渡って大学教員として務められましたのは、恩師や先輩・同輩・後輩の先生方、講座の先生方、さらには多くの職員の皆様のご支援とご協力があったからこそと心から感謝とお礼を申し上げます。

助手時代は職場に慣れることに始まり、先輩の先生に診療や基礎実習の仕方の指導を受けた6年間でした。続く講師の5年間は、責任が伴う講座・診療科の業務、新入医局員や臨床実習生(5、6学年)の指導などを行い、また委員として幾つかの会議に出席しました。講義担

当が始まったのがこの頃で、徐々に講義の種類や回数が増してゆきました。助教授の20年4カ月は、大先輩が多く出席されている種々の会議への参加が急増し、講座内外での対応の難しさ・大変さを痛感しました。しかし、大学の福利厚生としての観劇や会食で多くの教職員の方々と交流し親睦を深められたことは、楽しかった良き思い出です。また、多数の患者さんの治療に従事出来たことが、自身の人間形成に大いに役立ったと思います。講師時代を含めて学外で講演する機会が増え「井の中の蛙」では済まなくなってきました。

平成18年8月からの教授の7年8カ月はあつと言う間でした。1年目は全てが新しいこと尽くめで、新たな環境に慣れる為の準備期間と考え対応しましたが、精神的に疲労困憊した記憶だけが残っています。2年目からはブラッシュ

アップ委員長として5年間、学士試験、CBT・国家試験提出問題のブラッシュアップに携わりましたが、業務の厳しさ・辛さ・責任の重さを実感しました。しかし、他講座の先生方と講座の壁を取り払った環境下でディスカッションをしながら良質の問題を作り上げて行く得難い経験の中で、活気溢れる素晴らしい友を得ました。

平成20、21年は教育情報センター長、平成22～25年は附属病院副院長の役職に就けて頂きました。前者では三木室長はじめ委員の方々のご支援・ご協力によって職責を全うすることが出来て、感謝の念でいっぱいです。後者では病院長から託された院外処方の実施に漕ぎ着けられましたし、また教職員の院内感染防止に対する意識の向上に少しは貢献出来たのではと思っています。勿論、ICTリーダー・松本和浩先生の強力な牽引車あつてのことです。この間、学生部委員、教務部委員として指定校訪問、オープンキャンパスや入試時の受験生の面接に関わり、また在学生の生活指導や教育業務に携わりましたが、学年指導教授として6学年を3回受け持ったことは大学人として責任ある時間を過ごせたと同時に、退職後の忘れ難い思い出になりました。また、FD委員として各種ワークショップに参加した、ハードですが楽しかった思い出もあります。

どの時代も充実した時を過ごせましたが、退職前の2年間、新進気鋭の梅田教授と6学年の指導にあられたことは私の幸せでした。67歳に成って身体の彼方此方に「ガタ」が来ていますが、気持ちだけは青春時代です。



Hiroyuki Hayashi

大阪歯科大学は100年を超える歴史と伝統をもつ蓊蓊たる大樹に成長していますが、更に、太く聳え光り輝く大樹に育ちゆくことを念願し、定年退職のご挨拶とさせていただきます。大変お世話になりました、そして、有難うございました。皆様のご健勝をお祈り致します。

定年退職のご挨拶

歯科衛生部 宮本 美千子

平成26年3月31日をもちまして、43年間勤務させていただきました大阪歯科大学を定年退職いたしました。無事にこの日を迎えることができましたのも、ひとえに教職員皆様のご指導とご支援の賜物と心から感謝申し上げます。

昭和46年に本校附属の歯科衛生士学校2期生として卒業後、同期生8人（1人は他校卒業）と共に大阪歯科大学に就職しました。

附属病院勤務となり、最初に配属されたのは、メタルボンドが専門の陶材室でした。チェアーユニット2台、歯科医師4名、歯科技工士（女性）2名、歯科衛生士1名の診療室でした。配属されて初めてこの室のことを知ったぐらいですから、最初は不安でいっぱいでしたが、同時入職の歯科技工士さんとはとても気が合ったこともあり、勤務を続けることができました。

当時の歯科衛生士の業務内容は診療補助業務が主でした。器具の洗浄と消毒は全て各診療科で歯科衛生士が行っていました。ウォッシャー・ディスインフェクターなどない時代ですから、器具は手で洗い、シュンメルプッシュで5分間煮沸消毒したものを乾燥不良の状態で使用していました。医療安全面では現在と比べものになりません。

大学の行事にも参加させていただきました。秋に行われるボート祭は特に思い出に残っています。「バクテリア1号」と「バクテリア2号」のチーム名で同期生と参加しました。練習は、休日にボート部の学生さんに指導してもらい、1、2回ただけで本番となります。優勝は逃したものの楽しかったです。



Michiko Miyamoto

43年の間に、歯科衛生士の業務は大きく変化してきました。業務内容の拡大に伴い、歯科保健指導が大きく展開しました。歯科大学病院という特殊性のある本院では、健康増進のための歯科保健指導のほか、機能訓練や周術期の専門的口腔ケア、大手前病院へ訪問口腔ケアなどを行っています。

院内におきましては、新病院設立と同時に器具の中央化が始まり、歯科衛生士が本来の業務をする環境が整ってきました。これはひとえに先生方をはじめ皆様のご協力のお陰と感謝しています。

また、歯科衛生士の資質向上を目的として、平成18年に日本歯科医学会分科会の認定歯科衛生士制度が、平成21年には日本歯科衛生士会の認定制度が発足しました。歯科衛生部では全員が認定資格を取得することを目指しており、現在、日本歯周病学会、日本口腔インプラント学会、日本小児歯科学会、日本口腔感染症学会の4学会と日本歯科衛生士会の老年歯科、障害者歯科、生活習慣病予防、在宅療養指導、摂食・嚥下・リハビリテーションの5分野で20名が認定歯科衛生士として登録されています。ご指導いただきました認定指導医の先生方に感謝いたしますとともに、今後ともよろしくお祈りいたします。

最後に、大阪歯科大学のますますのご発展と、皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

定年退職ご挨拶

総務課人権担当 野中 登貴男

昭和51年4月に大阪歯科大学中央歯学研究所（旧総合研究部電子顕微鏡室）に技師として採用していただき、32年間中央歯学研究所で機器の管理や先生方の研究の補助等に専念してまいりました。平成21年6月から総務課人権担当になり、以後4年間人権業務という耳慣れない言葉にしどろもどろになりながら、松村大学管理部長（責任者）の話を聞きながら職務を遂行してきました。そんな中、総務課の仕事に足手まといと思いつつも懸命に努力してまいりました。

振り返ってみますと、昭和50年の秋思いがけない来訪者に目をぼちくりしたのを思い出します。立命館大学の基礎工学科（夜間部）を卒業し早2年になろうとし、早く就職を決めないと気ばかり焦っていた頃でした。昼間は京都大学の皮膚病特別研究施設に定員外職員として電子顕微鏡の管理運営の手伝いをしており、たまたまその施設長の西占教授が新しい試料作成法（フリーズ・エッチング法）を開発されており、そのついで当時本学の電子顕微鏡室の主任であった東名誉教授（その時は助教授）がお見えになったわけです。京都大学というネームバリューもあったでしょうが、その訪問が私にであり、最初は驚き、徐々に舞い上



Tokio Nonaka

がってしまったことを覚えています。25才の心に焼き付いた感激が30数年の長きに渡る奉職を可能にしたと思います。

そして、配置転換のため、60才近くに総務課それも人権担当と聞いたときは、何もわからない私にできるだろうかと不安な気持ちでしたが、今、人権担当は天の命じた指令であったのではないかとさえ思ってしまう。自分の生き方考え方に多くの寄与をしている人権です

が、そんな恩恵を職場や家族・地域社会に還元できないことに歯がゆさを感じています。そんなこれやで忙しい日々を過ごしている間に、なんと定年を迎えることが出来ました。

定年後は人権にかかわることをできる限り続けて行こうと思っております。最後に、今日まで38年間支えて下さった教職員の皆様方に感謝しております。本当に有難うございました。

教授就任

就任された下記2名の先生のご略歴とご挨拶を掲載いたします。

歯科審美学室 専任教授 末瀬 一彦 平成26年1月1日付
総合診療・診断科 専任教授 小出 武 平成26年3月1日付



歯科審美学室 専任教授

末瀬 一彦 すえせ かずひこ

歯学博士 / 昭和26年8月8日生まれ 62歳

<学歴>

- 1976年3月 大阪歯科大学卒業
- 1980年3月 大阪歯科大学大学院歯学研究科 博士課程修了(歯科補綴学専攻) 歯学博士の学位を受領

<職歴>

- 1980年4月 大阪歯科大学助手(歯科補綴学第二講座)
- 1990年4月 大阪歯科大学講師(歯科補綴学第二講座)
- 1997年4月 大阪歯科大学客員教授
- 1997年4月 大阪歯科大学歯科技工士専門学校 校長

教授就任ご挨拶

歯科審美学室 末瀬 一彦

平成25年12月の主任教授会ならびに法人理事会におきましてご信任を得まして、平成26年1月1日付けで川添堯彬理事長より「歯科審美学室専任教授」を拝命いたしました。

私は、昭和51年大阪歯科大学を卒業後、大学院(歯科補綴学専攻)に入学し、歯科補綴学第二講座の小森富夫教授のもとで博士課程を修了させていただきました

ました。大学院時代にはインプラントやジャケットクラウンの有限要素法による応力解析を中心に研究し、『全部鑄造冠の合着セメント層の力学的挙動』のテーマで学位論文を取得させていただきました。当時、有限要素法は歯科領域では新しい研究手法として取り入れられたところで、2年先輩の高橋典章先生から研究のいろはをご教示いただきました。当時は現在のようにPCが普及しておらず、専用のカードに1枚ずつ要素をキーパンチャーで打ち込み、それを束ねて、北千里にあった大阪大学大型計算機センター

に持ち込み、翌日プリントアウトされた結果を取りに行くという毎日でした。その後は同講座の助手として、学生の基礎実習を担当したり、臨床分野で補綴の基礎を研鑽させていただきました。そのころは、基礎実習は、総義歯(補綴第一講座)、局部床義歯(補綴第三講座)そして冠橋義歯(補綴第二講座)が合同で行うスタイルで、私も総義歯や局部義歯の実習に参画させていただきました。また臨床実習もG棟2階の総合診療部において、保存、補綴、口腔外科の教員が在籍し、学生の受け持つ患者をそれぞれの担

当医が治療をするという状態でした。私自身もここでは、補綴以外の多くの領域の治療を見せていただき、とても勉強になったことを覚えています。

昭和 57 年、小森教授ご定年退官後、岐阜歯科大学から川添堯彬先生が教授に就任されましたが、私は川添先生に対してそれ以前に強烈な印象がありました。大学院時代、大阪歯科学会において「プレスケールを利用して咬合圧を測定し、適切な顎間距離を決定する」という研究発表を行った時に、わざわざ岐阜からお越しいただき、昔の 5 階の階段教室の一番前に座られ、熱心に聴講していただき厳しい質問まで受けたことは今でも鮮明に覚えています。平成 2 年、川添教授から講師を拝命し、学生講義にも携わるとともに基礎実習、臨床実習の責任者として講座員とともに学生指導にあたらせていただきました。また研究分野においては、支台築造の材料や力学的解析、純チタンクラウンの臨床応用、ハイブリッド型コンポジットレジンクラウンやキャ

スタブルセラミッククラウンの新規開発にも参画させていただき、材料物性や臨床応用などの成果について補綴歯科学会や歯科審美学会などで研究発表させていただきました。このたびの教授選考に必要な業績資料を整理していただき、川添・末瀬の著者の論文や雑誌の多さに改めて当時、自由に研究させていただいたことに感謝します。

平成 9 年、ちょうど楠葉に新しい学舎が移転し、天満橋には最新設備の附属病院が完成した年、佐川寛典理事長のご拜命で歯科技工士専門学校校長としての任を仰せつかりました。まさに青天のへきききで、弱冠 46 歳の若さで、これまで歯科技工士教育の大家でおられた玉置敏夫校長の後継をすることには不安がいっぱいでした。正直、新しい学舎や附属病院を横目で見ながら牧野学舎に行くことは少しつらいものがありました。しかし、歯科技工士学校に出向けば、私より年配の多くの先生方から優しく受け入れていただき、心機一転、自分の立ち位

置を認識し、これまで充実した日々を過ごさせていただきました。平成 13 年からは、全国歯科技工士教育協議会の会長、日本歯科技工学会の副会長としての使命を果たすべく尽力してきましたが、当時は全国に 72 校あった歯科技工士学校も今では 53 校に減少し、卒業者数も 2,800 名から約半数にまで落ち込んでいます。歯科技工士の激減は将来の歯科医療の危機にも影響する忌々しき問題です。最近では、「歯科技工士国家試験の全国統一化」を実現させることに取り組み、歯科技工士教育向上のために行政や関連組織との折衝を行っています。平成 20 年には川添理事長のご拜命で歯科衛生士専門学校の校長を 6 年間兼務させていただきました。歯科衛生士専門学校では、全国歯科衛生士教育協議会の理事として教育カリキュラムの検討や教本編集に取り組みさせていただきました。両専門学校の校長として、学生募集に奔走するとともに学生講義も行い、両専門学校の合同講義や実習を取り込み、入学式や

卒業式の合同実施などを試みてまいりました。歯科医師、歯科技工士、そして歯科衛生士というまさにチーム医療を実践するための三者の基礎教育に携わりましたことは、誰もが経験できない、私にとりまして大きな財産であります。両専門学校の校長を務めさせていただいてます間も、審美的歯冠修復材料の基礎的、臨床的研究をひたすら継続し、最近では CAD/CAM システムの導入に伴う新規材料、特にジルコニアの材料特性や臨床適用などについて研鑽し、客員教授として大学 4 回生の「歯科審美学」の講義にも参画させていただきました。また、学会活動として、日本歯科審美学会の副会長として学術大会の開催や認定医・認定士の審査などを行い、平成 22 年に自ら創設した日本デジタル歯科学会では現在会長として CAD/CAM システムの普及やデジタルデンティストリーの啓蒙、学術大会の開催を行っています。

さて、「歯科審美学」は、歯科医療のなかで、多くの歯科疾患の治療学と並ん

で、歯、顎および口腔の美を科学として取り上げ、さらに心理的、社会性などを重視して追求する分野です。口腔内の状態を一人ひとりのあるべき健康な形態と円滑な機能に基づいた「美しさ、すなわち自然美」を回復、獲得する治療が歯科審美治療であり、歯周治療、咬合治療、修復治療、矯正治療、口腔外科治療などの多様な専門的アプローチによって構成されます。すなわち歯科審美は、これまでの歯科医学における領域的、縦系列の学問体系を横系列に組み替え、学際的な領域としての学問体系を構築して捉えるものであり、科学的方法によって客観的に歯科審美を探り、歯、顎、口腔系の構成を総合して把握、診断、治療する科学分野であると認識しています。そこで教育分野においては、基礎領域として、口腔顎顔面領域における形態美、色彩美、機能美に関する内容について学際的、科学的に説明できる能力を学習目標とし、さらに全身の健康と心のケアに関わる歯科審美の位置づけ、歯科審美治療に関わ

る各教科目の専門的役割について教授したいと考えます。臨床領域においては、歯科審美治療のための検査、診断、専門分野における治療法、材料学、さらにはライフワークに即した予防的アプローチなどに関する専門的知識と技術の習得を目指したいと考えます。高齢社会に突入したわが国において、国民の日常生活の質の向上に直接関わる歯科医療において、歯科審美が全身の健康の保持、増進に果たす重要な歯科医学分野であり、歯科審美の全人的な役割についてグローバルな考えを伝えたいと思います。最近では、歯科医師国家試験におきましても「歯科審美」に関わる出題も散見され、基礎的、臨床的領域に関する理解力を深める一助したいと思います。さらに、これまで私が行ってきました歯科技工士や歯科衛生士教育と歯科医師教育との専門領域の接点を求めたチーム医療の実践の場として、歯科審美における教育効果を図りたいと考えます。一方、歯科審美治療を実践するための基礎的な技術教育も重

要であり、審美的配慮のもとに行われる歯の切削、色調選択さらにはCAD/CAMシステムにおける修復物の構築などの基本操作についても学生にとって興味ある基礎実習も取り込みたいと思います。

次に、『研究分野』については、これまで継続してきた歯科審美治療に関わるハイブリッド型コンポジットレジン、セラミックスなどの材料分野、修復物の力学的挙動に関する研究およびこれからの歯科医療を支えるCAD/CAMテクノロジーに関する基礎的研究をさらに推進するとともに、歯科審美治療に対する評価法、歯科審美治療が及ぼす心理的側面、

全身の美との関わりなどについても研究領域を広げていきたいと思えます。特に、口腔内におけるメタルフリー治療を目指して、硬組織代替生体材料としてのハイブリッド型コンポジットレジンの高機能化を有する材料開発、ジルコニアの特性を活かした効率的な使用方法と接着技術、オープン化を目指したCAD/CAMシステムにおける口腔内スキャナーやCADソフトの開発などについて取り組みたいと考えています。

これまでに全国の歯科大学のなかには、『白い歯外来』『美容歯科外来』などが設置されてきましたが、いずれも診療

科を中心としたものであり、教育や研究を基盤にした教室や講座は設置されていません。このたび本学において「歯科審美学室」が教育・研究部門から開設されることは、大学教育として極めて意義深いと考えます。将来的には診療科として審美治療を望む多くの患者の期待に応えるためにもその基盤作りとして専任教授のミッションを果たしたいと考えます。

大阪歯科大学ならびに両専門学校の皆さんにおかれましては、これまで以上のご支援、ご厚情を賜りますよう心よりお願い申し上げます。



総合診療・診断科 専任教授

小出 武 こいで たけし

歯学博士 / 昭和24年7月12日生まれ 64歳

<学歴>

- 1974年3月 大阪歯科大学卒業
- 1978年3月 大阪歯科大学大学院歯学研究科 博士課程修了（小児歯科学専攻）
歯学博士の学位を受領

<職歴>

- 1978年4月 大阪歯科大学助手（小児歯科学講座）
- 1995年8月 大阪歯科大学講師（小児歯科学講座）
- 1999年4月 大阪歯科大学附属病院 臨床教授（総合診療部診療科）
- 2004年4月 大阪歯科大学附属病院 病院教授（総合診療部診療科 現 総合診療・診断科）

教授就任ご挨拶

総合診療・診断科 小出 武

大阪歯科大学主任教授会の選出および法人理事会の承認を得て、平成26年3月1日付で大阪歯科大学附属病院総合診療・診断科専任教授を拝命いたしました。

平成20年4月、本学の機構改革により総合診療部診療科と口腔診断科が統合され、附属病院内に当科が新設されました。前身である総合診療部診療科は平成11年4月に大阪歯科大学臨床歯科学研究

所附属診療所（OMMビル診療所）を引き継ぐ形で附属病院南館2階に新設されました。患者の医療ニーズに応えることを重視した臨床歯科学研究所の姿勢を受け継ぎ、附属病院内でも患者の満足度を第一義とした総合歯科治療に取り組んできました。また、平成18年の歯科医師臨床研修義務化以降、同事業に積極的に関わり、院内の複合型臨床研修の担当科として臨床研修歯科医の育成に尽力してきました。一方、口腔診断科は、附属病院の予診部として始まり、昭和54年に口腔診断科と呼称変更された後、昭和

56年に口腔診断学講座が開設されました。平成9年の新病院開設に伴い、附属病院の本館2階に明るく、広いスペースが与えられ、新病院の要として新患者や再来患者の対応を行ってまいりました。

私は昭和49年に大阪歯科大学を卒業後、同年、大阪歯科大学大学院に進学し、稗田豊治先生が主管された小児歯科学を専攻いたしました。昭和53年に同講座の助手として採用され、以来、平成11年に総合診療部診療科が開設されるまでの25年間を小児歯科を専門とし、教育、研究、診療に携わってまいりました。

教授就任にあたり、ご挨拶と教育、研究、診療に関する抱負を申し上げます。

日本総合歯科学会の規約には、その活動の目的が以下のように記載されています。「包括的歯科医療である患者中心の総合歯科診療並びにそれにかかわる臨床・基礎研究、及びこれらの卒前教育・卒後研修並びに生涯（継続的）研修についての研究などの発表を通じて、包括的歯科医療を担う歯科医師の養成に寄与することを目的とする」とあります。当科が開設以来、歩み続け、また、これから進もうとしている方向はおおむねこの目的と一致しています。私たちが実践している総合診療を通して、学部学生および卒後研修歯科医を教育し、患者に信頼される歯科医師を育てたいと考えています。現在、学部学生の教育は、診断部門での臨床実習が中心で、実際の患者に問診および診査を課し、初期診断などができるように指導しています。特に、医療面接に関しては、シナリオの作成を課題として与え、その充実を図っています。

人間関係が複雑で、患者の要求が多様化している現在、歯科医療においても、従来型の問診だけでは満足できる結果は得られません。医療コミュニケーション技術を使い、患者の背景を見つめ、その訴えに共感し、患者および医療者がともに満足できる患者中心の歯科医療を実践できる歯科医師を育てたいと考えています。

また、臨床研修事業に関しては、複合型の歯科医師臨床研修プログラムの指導歯科医として総合診療部門の臨床研修歯科医の研修を担当しています。基本的な診療能力を持ち、患者の心を斟酌できる実践に強い歯科医師の育成を目標としています。総合歯科診療の実力を向上させるため、担当患者の要望を十分に取り入れた総合治療計画の立案を課題として与え、その症例発表を義務付けています。歯科衛生士の教育実習機関としても貢献しており、現在7校が当科で臨床実習を行っています。歯科治療全般を教えるとともに歯科治療の一般的な流れについて

指導しています。また、当科所属の5名の歯科衛生士による歯周疾患のメンテナンスも研修の重要な部分であり、その見学を通して、患者との関わり方を学んでほしいと思っています。臨床歯科学研究所で実践されていた「フォーハンド・デンティストリー」についても教育しています。

一方、一昨年より大学の既卒者教務部委員会の委員として、歯科医師国家試験不合格者の支援プログラムに参画しています。既卒者との連絡を密にとり、学力や学習状況の把握に努めています。その結果をもとに学習指導を行うとともにメンタル面のサポートを重視した支援も心がけています。将来的には支援に必要なマニュアルを作成し、有効かつ継続的な支援が実施できるようにし、既卒者の中から一人でも多くの合格者を出すようにしたいと考えています。

教育に関連する研究では、臨床研修事業における研修歯科医教育に関するものが多く、臨床研修内容の評価法や、研修

医のストレスやその緩和法などがあります。これらの研究経験を生かし、新たな歯科医学教育のありかたや方策を提言出来るような研究を行っていきます。とくに、医療コミュニケーション教育に関連する新しい取り組みの有効性を検討します。

音声入力による診療録記載を主要なテーマとして一連の研究を行っています。口腔診査内容の音声入力のほかに音声入力法を用いて難聴者を対象とした医療面接時の文字表示システムの構築を試みています。今後は、この音声入力法を用いて、患者の発音を評価し、補綴物、歯列不正、口腔機能障害などが音声に及ぼす影響を検討する予定です。また、発音障害のある患者の発音を音声入力法の修正技術を用いて、正しい発音に変換する方法も検討しています。歯科医学の研究領域において音声、特に日常会話に関する研究は少なく、生活の質の向上が重要視されている現状から推察すると、将来、発展が

見込まれる分野だと考えています。

診療に関しては、当科のみですべての歯科治療を行うという特性から、効率的に治療を進めることで患者の時間的ニーズに応えたいと考えています。また、基本を忠実に行うことで、安全、確実に、持続性のある歯科治療を提供したいとも考えています。そのために各学会が公表している診療ガイドラインを参考にしています。さらに、総合診療の独自性を追求し、歯周補綴など単独の科では実現できないような診療を行いたいと考えています。開業歯科医院からは治療困難症例が、また、医科系の病院からは全身疾患を有する患者が数多く紹介されており、これらの患者にも院内各科と連携をとりながら治療にあたっています。

近年、医療の高度化や高齢社会の到来によって、急速に歯科衛生業務の需要が増えています。歯科保健・予防管理を軸とする保健医療サービスの重要性が人々に浸透しています。当科でも歯科衛生士による歯周疾患のメンテ

ナンスに由来から取り組んでいますが、さらにその充実を図り、患者それぞれのQuality of Lifeの向上を目指したいと考えています。

診断部門では、診療各科と密に連携し、初診患者を有効に振り分け、病院の業務改善に寄与したいと考えています。

最後に、大阪歯科大学ならびに総合診療・診断科の発展のために全力を尽くす覚悟です。また、本年4月1日に任命された大阪歯科大学歯科衛生士専門学校校長職に関しても微力ではありますが、精一杯努めます。今後とも、川添理事長・学長、各教授ならびに教職員の皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年度 学生短期海外研修派遣

平成25年度の学生短期海外研修は、中国の北京大学口腔医学院、オーストラリアのシドニー大学歯学部、アメリカのコロンビア大学歯学部それぞれ派遣され、現地の歯科医学の空気に触れる貴重な体験となりました。

■ 北京大学口腔医学院

2013年7月18日～24日

学生5名（2年2名・3年1名・4年2名）

引率：吉川准教授（歯科保存学講座）

研修は特別講義・臨床見学を主体としたプログラムで、学生も積極的にディスカッションに参加するなど、たくさんのご機嫌伺いを吸収していました。また、ウェルカムパーティーでは北京大学の学生による温かいおもてなしに、学生同士の友情も深まりました。



■ シドニー大学歯学部

2013年8月17日～26日

学生6名（3年5名・4年1名）

引率：牧田助教（化学教室）

シドニー大学歯学部は、大学のあるキャンパーダウン、ウェストミッド病院、シドニー歯科病院の3カ所に分かれており、それぞれの施設で歯学部長との懇談、基礎講義、臨床講義および臨床実習を受け、関連施設を見学しました。座学のみでなく、少人数での討議“PBL”や臨床実習にも参加し、日本での講義では得られない新鮮な学びがありました。ウェルカムパーティーではシドニー大学の学生と大いに盛り上がりました。



■ コロンビア大学歯学部

2014年3月8日～18日

学生8名（5年8名）

引率：藤田准教授（英語学教室）

田中准教授（有歯補綴咬合学講座）

コロンビア大学歯学部長との懇談や基礎講義、臨床講義および臨床実習を体験し、特に臨床実習では、診療参加型臨床実習のレベルの高さに触れ、日本とアメリカの臨床実習教育の違いを身をもって経験しました。ウェルカムパーティーでもコロンビア大学の学生との交流に、たくさんの刺激をもらいました。



■ 平成25年度 解剖体遺骨返還式

平成26年2月3日(月) 14:00 楠葉学舎

厳寒の中、平成25年度の解剖体遺骨返還式が執り行われました。初めに、歯科医学教育のためご献体いただきました24名の方々の御霊に対し黙祷が捧げられ、続いて、川添理事長・学長より故人の篤志の心とご遺族の深いご理解に対し、あらためて感謝の言葉が述べられました。引き続き、ご遺族への感謝状贈呈に移り、ご遺族お一人お一人に理事長・学長より感謝の言葉を添えられ、ご遺骨と感謝状を手渡され、最後に解剖学講座 諏訪主任教授より謝辞が述べられ、滞りなく終了しました。

■ 第21回 公開講座(枚方講座) 開催

平成26年2月22日(土)、3月1日(土) 10:00～12:00 楠葉学舎講堂

昨年9月、大阪歯科大学創立100周年記念館で行われた天満橋講座に引き続き、第21回公開講座の枚方講座が開催されました。

2月22日はまだ寒さが残る中、217名もの市民の皆様にご参加いただき、メディポリスがん粒子線治療研究センターの菱川良夫先生に「闘わないがん治療」と題し、患者さんにとって優しい治療ともいえる“粒子線治療”についてご講演いただきました。質疑応答では、受講者からのがんに関する深刻な悩みに対して、暖かみのある言葉で一人一人丁寧にお答えいただきました。

3月1日の受講者は212名で、本学口腔インプラント科の馬場俊輔先生が、「自分の細胞から組織が甦る」をテーマに、連日新聞等を賑わせているiPS細胞など再生医療の仕組みを紹介し、歯周病への応用など口腔領域の再生医療について、歯科医師の目線からお話ししました。



■ 第9回 附属病院 歯科医師臨床研修指導歯科医講習会

平成26年1月12日(日)～13日(月・祝) 大阪歯科大学附属病院
主催：学校法人大阪歯科大学 / 共催：一般財団法人 歯科医療振興財団

講習会主催責任者の川添堯彬理事長・学長はじめ本学教職員スタッフ20名により、「歯科医師の臨床研修に係る指導歯科医講習会の開催指針」(平成16年6月17日付け医政発第0617001号)にのっとった内容で開催。専任教員及び一般応募者の27名が受講し、全員が所定のプログラムを修了し修了証書が授与された。



■ 平成26年 歯科医師臨床研修 情報交換会

平成26年2月6日(木) 16:15 大阪歯科大学附属病院 プラザ14
主 催：学校法人大阪歯科大学 学生部
出席者：現研修歯科医45名
 歯科医師臨床研修プログラムC(複合型)の研修予定者87名

川合進二郎学生部長、覚道健治病院長の挨拶後、現研修歯科医と研修予定者と活発な情報交換が行われた。現研修歯科医より管理型及び協力型での研修について、直接現状が聞け、またアドバイスを受けることもできるため、例年実施しているアンケートではとても好評である。今回は現研修歯科医の出席者も多く盛況で中締め、閉会後も活発な交流が行われた。



■ 第11回 大阪歯科大学附属病院 病診連携講演会・懇談会

平成 26 年 2 月 8 日 (土) 15:30

平成 25 年 1 年間の患者紹介医療機関：2,567 施設

施設の出席者数：講演会 56 名、懇親会 23 名

西館 5 階臨床講義室において、覚道健治病院長挨拶、初診患者・総合受付等の説明、院内診療科の紹介後、「矯正歯科治療における抜歯」について矯正歯科 松本尚之科長が講演を行った。その後、プラザ 14 にて懇談会を開催した。



■ 平成 26 年度 歯科医師臨床研修 協力型臨床研修施設による施設紹介・面談会

平成 26 年 2 月 9 日 (日) 9:30

参加協力型臨床研修施設数：面談ブース 27、プレゼンテーション施設 26

研修予定者 87 名出席

覚道健治臨床研修総括責任者の挨拶後、研修予定者は各会場に分かれてブース施設と面談を行った。プレゼンテーションは各施設 5 分間行い、その後面談した。現役研修歯科医のアンケート結果では、群内マッチングの参考になる等と好評である。



■ 平成 25 年度 歯科医師臨床研修 研修歯科医症例報告会

平成 26 年 3 月 13 日 (木) 10:00～15:40 天満橋学舎 西館 5 階 臨床講義室

覚道健治病院長の挨拶後、臨床研修で体験した症例の報告をプログラム S (単独型) とプログラム C (複合型) を併せた 15 科が行った。

各科座長による紹介のもと、演者の研修歯科医が 7 分間で発表した。審査員からの指摘や質問に困惑する場面もあったが、座長や科長から補足説明等の支援を受けた。生涯研修の第一歩となる報告会であった。



■ 平成 25 年度 歯科医師臨床研修 研修歯科医修了証授与式

平成 26 年 3 月 25 日 (火) 14:30 天満橋学舎 西館 5 階 臨床講義室

川添堯彬理事長・学長からの祝辞と、覚道健治病院長の訓辞による答辞として、研修歯科医代表 今西雅也氏 (口腔外科第二科) より、指導いただいた先生方に対し謝辞が述べられた。

平成 25 年度歯科医師臨床研修は、研修歯科医 116 名 (自学出身者率 77.6%) を受け入れ、全員が所定のプログラムを修め修了証が交付された。研修歯科医優秀者及び症例報告会の表彰は、以下の研修歯科医及び診療科が表彰された。



■ 「トクヤマデンタル賞」受賞者の表彰及び記念品の贈呈

野村 有希 (臨床研修教育科)

藤尾 美穂 (欠損歯列補綴咬合治療科)



■ 症例報告会（平成 26 年 3 月 13 日）の表彰

【病院長賞】「メトトレキサート (MTX) に関連する口腔内疾患について」
口腔外科第二科（演者：今西 雅也）

【優 秀 賞】

「関節円板の前方転位は異常なのか」 臨床研修教育科（演者：山下陽平）
「各種問診法からみたレジン床と金属床義歯の違いの患者理解度の評価」
欠損歯列補綴咬合治療科（演者：藤尾 美穂）



■ 平成 26 年度 診療報酬改定に伴う講習会

平成 26 年 3 月 31 日（月） 16:00 創立 100 周年記念館 4 階大講義室

講師：上田 雅俊 名誉教授（法人顧問）

講師：井関 富雄 准教授（口腔外科学第一講座）

■ 医療保険委員会からのお知らせ

内容：「歯科治療総合医療管理料の算定について」

講師：大井 治正 講師（臨床研修教育科）

平成 26 年 4 月 1 日から実施される診療報酬改定に伴う説明会を開催し、主に改定の要点について講習を行った。歯科治療総合医療管理料について、該当する症例では積極的に算定いただくように算定手順等について理解を求めた。



平成 26 年 新年互礼会

平成 26 年 1 月 6 日（月） 午前 11 時より平成 26 年新年互礼会が楠葉学舎講堂で開催されました。

教職員をはじめ関係者多数が出席し、川添理事長・学長による年頭所感に耳を傾けました。川添理事長・学長は、本学のこれまでの実績と今後の方針について、スライドで示しながら述べるとともに、それぞれの職務をさらに熱心に行うよう奨励しました。

その後、食堂での交歓会では、それぞれ新年の挨拶を交わし、一年の始まりを祝いました。



年頭所感

理事長・学長 川添 堯彬

新年明けましておめでとうございます。
本日は、新年の初めに二つのキーワードについてお話いたします。それは「感謝」と「ミッション（使命）」です。
昨年暮れの忘年慰労会におきまして、教

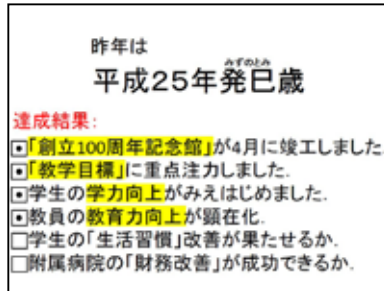
職員の皆様に 1 年間を通じてご助力いただいたことに感謝を申し上げます。そしてまた、ここで新たに感謝申し上げます。理事・監事の先生方、教授の先生方、そして教職員の皆様のご支援・ご協力がなかったならば、

このような難局にある大学運営が円滑に運んでいなかったと思うわけでありませぬ。ありがたいことに、この時点までは教学から財務に至るまで、すべて心配のない状態で運んでまいりました。この状態を今年も続けられるよう、何卒よろしくお願ひします。

次に、ミッションについてです。この新年互礼会において10項目以上の重圧や逆風を列挙し、歯科界および歯科大学が非常に困難な状況に直面しているのだということをお知らせしてはや7年近くにもなります。これらの中には軽減されたものもありますが、依然として逆風は吹き続けております。しかし、今年の年頭は、なぜかしらそう悪い状況にはなっていない、希望がある、期待を持てるという心境でございます。新聞の安倍総理の言葉ではありませんが、なぜかワクワクとし、もうやるしかないという覚悟、そういったものが今、去来しております。

現状において一番大きな逆風は国からの要請であります。私立歯科大学には入学定員の8%削減を求められております。また、文科省の通信簿では7項目も挙げて、それが達成できない状態が2年以上続けば、定員数を翌年からさらに減らすようにとも言われております。しかし、それに対して何とでも「そうですか」とは言わずに、歯科医師過剰だから定員削減をせよと言ってくることに對し、闘わないといけないうちで思っております。

国立にはこういった心配は全くありません。今の12校は残っていくでしょう。しかし、私立歯科大学はやはり、最終的には財政問題で揺さぶられます。一番の泣きどころです。一時的に授業料を半額にしたら、確かに大勢の受験者が押し寄せます。しかし、それは長くは続かないかもしれないし、教育の質を落とすかも知れない。ですからやはり、財政問題をクリアした上で、歯科大学を取り巻く様々な問題を、我々一人ひとりが自分のこととして受けとめ、ミッション(使命)を果たさなくてはなりません。この17の私立歯科大学全てが今の定員のまま生き残れるように、歯をくいしばって努力しないと行けないと思っております。今年の年頭は、負けない手応えを感じております。それには今まで以上に皆様方のご支援・ご協力をお願いしたいと思います。



では今から、できるだけ手短かに本学の状況、目標に対してどこまでできていて、どこからはできていないのかを説明いたします。

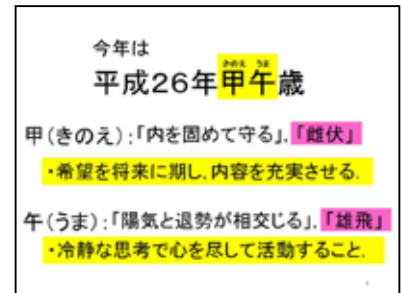
まず創立100周年記念館が3月に竣工し、4月からオープンして、色々なことに活用されております。同窓会の先生方をはじめ大勢の皆様からのご奇特な寄附によって建てられたものでございます。

2点目は、教学目標に重点注力しました。だいぶその効果が出てきたという実感があります。教務関係の先生方には本当に努力をしていただきましたので、学生の学力向上が見え始めてまいりました。6年間もあるわけですから、すぐに一気に国家試験の合格率に結びつくとは行かないかもしれませんが、我々が見ても体感するところであります。

3点目は、教員の熱心さがあちこちにはつきり出てくるようになって、学生からも「熱心にやってくれる」「よくわかる」「講義を工夫してくれる」などといった意見が聞こえてくるようになりました。学生の態度もだいぶ良くなっているような気がいたします。

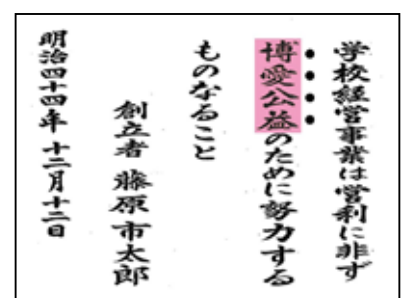
しかし、まだ達成できていない課題が2点あります。一つは学生の生活習慣の改善で、特に成績低迷組の人は朝起きられない、そのために大事な授業や学内の模擬試験などに遅刻したり欠席したりする。これは1年生のときから引きずっていることであり、今年、何としてでも改善し、成績低迷組の学力をアップしないと行けない。しかし、これはかなり難しい。しつけの問題もあるような感じもいたします。

二つ目の、附属病院の財務改善については、昨年から手がけ始めましたけれども、これもまた大変な課題であり、まだ効果が出ておりませぬ。



今年甲午(きのえうま)という干支であります。甲(きのえ)と、午(うま)というのは、実に不思議な組み合わせで、相反する卦が出ています。

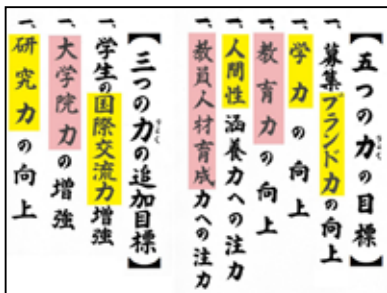
甲(きのえ)は「雌伏」、すなわち内を固めてあまり外へ出さない、発散・飛躍しないということで、出る番をじっと待とうという卦です。午(うま)は反対に陽気のほうで「雄飛」、すなわち行け行けどんどんという感じ。 「雌伏」と「雄飛」という正反対の卦のどちらを優先するかは迷うところですが、「天馬雄飛」と表わしました。やはり「午年」ですから陽のほうをとったわけです。



本学100周年記念事業の中で、奇しくも藤原市太郎氏が明治44年12月12日に掲げた理念「博愛公益のために努力するもの」を見つけたときは本当に驚きました。「学校経営事業は営利に非ず」私立として歯科大学を運営するのにこのように崇高な、遠大な理念を掲げていたのです。どこへ出して

も恥ずかしくない建学の精神であります。

先般、コロンビア大学から来られたストーリー歯学部部長も、Philanthropy (博愛) を一つの目標に掲げておられました。



学生には常に「大志を胸に、まず6年後を目標に目指しなさい」と言っており、「五つの力」と「三つの力」とを合わせて八策を達成しようというのが、5年前からの本学の目標であります。

この中で「学力の向上」と「教育力の向上」、「教員人材育成力への注力」の三つは少し動き出して効果が出てきたところではありますが、今年は「教育力の向上」「教員人材育成力への注力」にはさらに努力が必要です。今後2年の間に教授が多数退職いたしますので、この補充任用が大きな課題です。

もう一つ、「大学院力の増強」が相当の武器になるのではないかと感じております。修士課程をつくり、専門学校を短大や四大に引き上げようというものこの考えからのものであります。後ほど詳しく申し上げますけれども、今年早々に申請を出すことになっております。

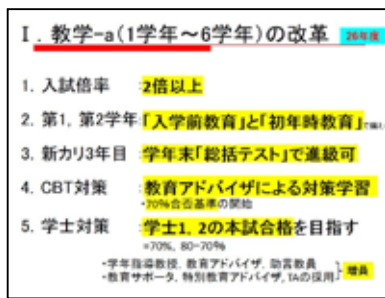
次に事業計画について申し上げます。

事業計画 (平成26年度～)

- I. 教学 (学部教育) の改革
- II. 大学院の改革
- III. 教員人材の整備
- IV. 附属病院の財務改革
- V. 両専門学校の組織・人事改革



I. 教学 (学部教育) の改革



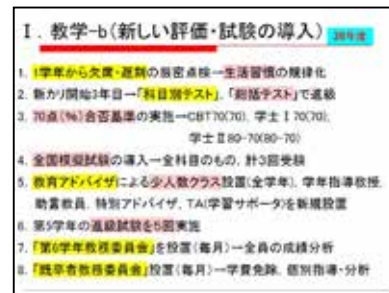
国家試験の合格率を上げるには、それより下の各学年の進級率を上げること、これは文科省からの通信簿でも進級率を上げないと大学を潰すように言われるわけでありますから、これに全力を挙げないといけない。まずは1～6年生の教学改革を行うこと。これに対しては、教養系の先生が、推薦入学者には理科やそれ以外の高校の苦手教科を「入学前教育」で行い、入学後は「初年次教育」でかなりみっちりやっております。

新カリキュラムが3年目になります。実力をつけるために、一旦各科目のテストが受かっても、もう一度学年末に総括テストをやって、それにクリアして初めて進級ができる、というカリキュラムを導入しております。

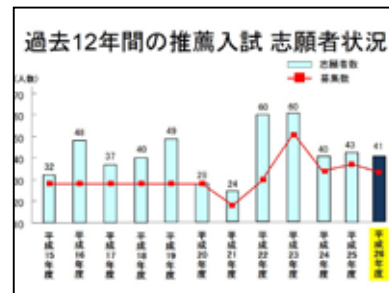
それから CBT は、文科省の狙いでは第1次国家試験ということですが、これは実力が出ますので、4年生の分を5年生の初めにやるようになるわけですね。それで少人数クラスを設置し、教育アドバイザーによる指導を行っております。これは、非常に需要が増えてまいりまして、1年生から6年生まであっちこっちから引っ張りだこになっておるわけであります。

そして、学士試験というのは、卒業試験あるいは国家試験に直接反映されるということで、学士試験 I と II を設けておりますが、この合格を目指すということ。この合格基準を70%にします。学士 II の必修についてはこれを80%にしています。対策として指導教授、教育アドバイザー、助言教員、教育サポーター、特別教育アドバイザー、ティーチングアシスタント (TA)、この六つの役割を教務関係の教授、准教授、講師の先生で担っているわけであります。この試験の点数をもう少し上げないと、これらをクリアしても国家試験の合格率は上がらないということで、東京方面の多くの大学ではほとんど

切り替えております。本学は切り替えが少し遅れたために、一昨年のように非常に低迷したときがありました。



それから、教務部委員会 (1～6年生) は毎月開かれています。それに加えて第6学年のみの教務部委員会を毎月開催、既卒者・国家試験に合格していない卒業生の教務部委員会というのも毎月やっています。この人たちは完全学費免除にしまして、初の試みですが、個別指導や成績分析を行っております。

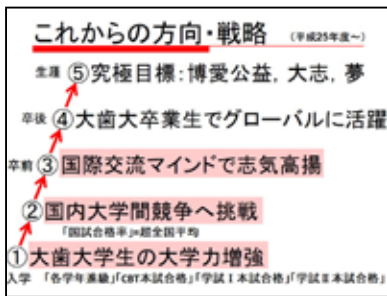


過去12年間の推薦入試と志願者の状況は、平成23年度までは志願者がかなり多かったですね。この後あたりから、少子化の影響など様々な要因で、志願者40人程度で、35人採ったりするわけでありまして、倍率も全体が1.8など2.0を切るようになってきた。定員割れはしませんけれども、医科系の入学試験は2倍以上の倍率がないと認めてもらえませんので、やや黄色ランプであります。



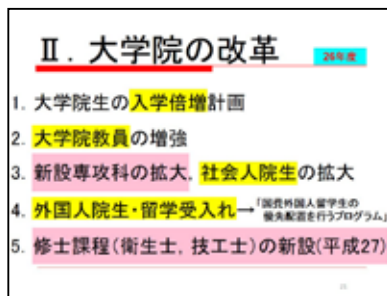
次に、平成14年から12年間の国家試験の新卒者の状況を見てみますと、特に声高に教務部がガンガン叫んだときは少し上がっています。そのあと一旦ガタンと下が

りまして、平成24年には64.0%、昨年少し上がって74.3%になりました。しかし、まだ全国平均を超えてないですね。全国平均を超えるには、だいたい上位5位以上に入らないといけないので、それが今年果たせるかどうかというところでございます。2月に行われました国家試験の合格発表が3月18日にありますけれども、その結果でどうなるか、どうぞ期待でございます。しかし、全体的に上がっておりますので、今後は落ち込むことはもうないと思います。



教学の面で我々が目指しているところは、学生がオープンキャンパス時、または入学後に、歯科医師という職業は社会的地位以上に、志や夢を実現できる職業なんですよ、ということを知り、早めに高い目標を設定するという。そのために、まじめに勉学し、この①・②を早くクリアしようということ。そして、国家試験の合格率が全国平均を超えるようになりますと、後はできるだけ夢は大きいほうがいいですから、将来を見越して国際交流マインドで志気を高めていただく。この①→②→③の形を早く築きたい。そうしますと、大阪歯科大学の卒業生は非常にグローバルな感覚を持っているし、どういう場であっても活躍できる。方々で活躍する本学の卒業生がどんどん増えてくるはずであります。そういうところへ早く到達したいということで、まずこの①→②を今年あるいは来年と、今から3年ぐらいで安定するまで目を離せない状態です。しかし、それまでも国際交流マインドだけは身につけて卒業してほしいという戦略であります。

II. 大学院の改革



次は大学院です。大学院の改革は大きく五つに分けてやっております。

まず、入学倍増計画は、毎年30人以上をコンスタントに入れることで、量的整備をしたい。

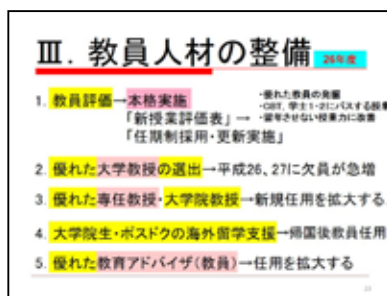
それから、大学院教員の増強です。あの先生が大学院教員で指導してくれるのなら大学院へ残ろうかと、そういう先生を探さないといけないですね。

三つ目は、新設専攻科の拡大です。最近では口腔インプラント学を設け、今後は障がい歯科学、あるいは歯科法医学だとか歯科心理学だとか、これらを専攻する大学院生が出てきてほしい。

四つ目は、外国人の受け入れです。これは後ほど説明します。この年末に飛び込んできた一つのプロジェクトがあり、できるだけ進めたいと思っております。

五つ目は、専門学校の分野に修士課程をつくるということで、計画はもう全部できております。今年早々に申請しても募集は平成27年からのスタートになりそうです。

III. 教員人材の整備



次は教員人材の整備についてです。具体的には教員評価ですね。CBTや学士試験にパスする授業、あるいは、よく理解させ毎年させない授業に改善する力を持った教員を発掘するために、「新授業評価表」というのを昨年中ごろから導入しております。「声ははっきりしてわかりやすい」「黒板の字が小さくて読めない」「資料が少ない」など、

学生の意向を主にした評価内容を加えて実施しますと、非常に浮き彫りになって、よくわかるようになってきました。これを本格実施したい。

それから、優れた大学教授の選出です。本年と来年に欠員が急増いたしますので、また優れた教員の補充任用をし、専任教授も新規任用を拡大していく。大学院教授についても先に述べた通りです。

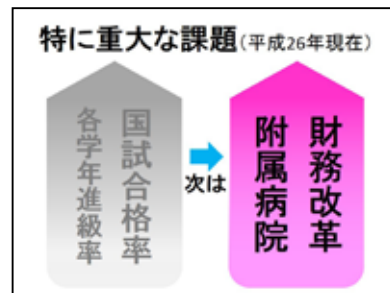
それから、大学院生やポストクの海外留学の支援をどんどんやる。帰ってきたら本学で教員任用するというので2年間は行ってほしい。これはだいぶ前からやっておりますし、実際に採用された先生もおられます。

それから、優れた教育アドバイザー任用の拡大ですね。国家試験合格率が安定するまでまだ数年かかりますし、また順調に進級して国家試験に合格してくれる学生ばかりとは限りませんので、そういう学生を導く教員が求められています。

年度	定年等による欠員	補充および新規任用予定
2012 (H24)	0	0
2013 (H25)	0	+2
2014 (H26)	-3	+6
2015 (H27)	-6	+5
2016 (H28)	5年間 -2	+2 (11名欠員)
2017 (H29)	-4	+3
2018 (H30)	-5	+5
2019 (H31)	0	0
2020 (H32)	-2	+2
2021 (H33)	5年間 -1	+1 (12名欠員)

先ほど申しました通り、平成24年～28年の5年間で11名の教員の欠員があり、専任教授も含めて15～16名の任用が必要だろうと予測しています。さらに後の5年間では12名、合計いたしますと23名の欠員をここ2年の間に完全に補充しないとイケない。これも大変な作業を伴う大学の運営業務であります。

IV. 附属病院の財務改革



次は、もう一つの喫緊の課題、附属病院の財務改革であります。マンモス化しているためになかなか一筋縄ではいきません。

IV. 附属病院の財務改革 20年度

1. 医療収入と患者数を指標：月次
2. 土曜日開院を拡大化
3. 各科ごとの収支改善：※考慮、月次
4. 臨床実習フロアの統一：(第5学年 + 臨床研修医)
5. 病院運営貢献者への顕彰・報奨

大きな改革・検討の柱は、医療収入と患者数でもって各科を見直し、改善するところはないか、できたら毎月それらの指標を見ていきたいと思っています。

土曜日開院は、矯正歯科と小児歯科とが実施しておりますけれども、ほかの科にも広がってほしいというのが経営改善委員会の意向であります。

各科ごとの収支改善をB/C考慮のもとに分析していくとやはり、医療収入だけではなく支出改善も必要であります。それを1～2カ月単位で分析し、改善点を浮き彫りにしていきたい。

それから、臨床実習フロアについては、理事の先生からも進言されているプランですけれども、第5学年の臨床実習と卒後の臨床研修医のフロアとを一体化して、指導者の下でどんどん参加型の診療をやらせないといけない。これは文科省の通信簿の項目でもあります。この実施だけでも病院を活気づけることに役立ってくれると思います。

こうした厳しい外枠ばかりではなく、課題をクリアしたときの顕彰や報奨などのインセンティブも同時に考慮し、附属病院の改革に注力したいと思っています。

V. 両専門学校の組織・人事改革

V. 両専門学校の改革 20年度

- 歯科技工士専門学校 → 募集力アップ検討
 - ・大学院修士課程へ奨励
 - ・“インプラント技工学” “CAD/CAM技工学”を前面に出す
 - ・短大or4年制大学開設構想
 - ・国家試験の全国統一実現
- 歯科衛生士専門学校 → 入試倍率アップ検討
 - ・大学院修士課程へ奨励
 - ・4年制大学開設構想

最後は、両専門学校の組織・人事改革であります。これまでずっと項目に挙げて、将来どのように専門学校をなくてはならないものにしていくかを検討し続けてきたのですが、なかなか妙案が浮かばなかった。しかし、専任教授も一人生まれましたし、

例えば一つの作戦として、卒業してから引張りだこになるようなインプラント技工学だとかCAD / CAM 技工学を前面に出して、それを最低2年間で学べる学校ですよ、あるいは短大ですよ、というPRをしていけばどんどん集まってくるのではないかと。

それから、歯科技工士国家試験の全国統一化が厚労省で検討が始まっておりますけれども、それが実現すれば、短大か四大の開設も実現できるのではないかと。それをさらに現実的にするのが修士課程ですね。歯科衛生士にも修士課程を設けますと、4年制大学でも学科が開設されます。大阪では梅花女子大学で歯科衛生士学科が、この4月からできるようで、その卒業生が来てくれる公算が高いということにもなります。そして、本学の卒業生が本学の修士課程、大学院を卒業して、教員になる、教授にもなれるという形のプランが描けるわけで、かなり具体的に一步進めるのではないかといい気がします。採算的な財務の問題も同時に横でらみながら進めていかないといけないと思っています。

[特別重点計画] 平成26年度

【国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム】
 ミャンマー連邦共和国に対する歯学指導者養成事業

【受け入れ校】協力5大学
 東京医科歯科大学、新潟大学、広島大学、九州歯科大学、大阪歯科大学

【計画】
 ミャンマーから100名(年間20名、1大学約4名を5年間)の若手歯科医師を受け入れる。大学院博士課程に入学させ研究を指導し、同時に学部学生への教育にも従事させ、帰国後、直ちに歯科医師養成の教育に取り組めるようにする。

【経費】
 国費(文部科学省)

そして、これは最初の計画には入っていませんでしたが、昨年の年末に非常に明るいニュースがメールで送られてきました。

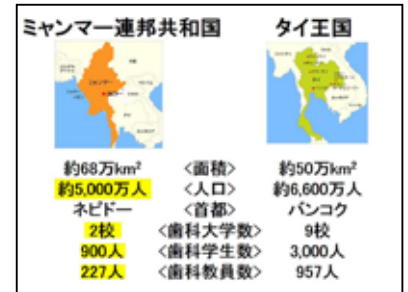
それは、国が行う「ミャンマー連邦共和国に対する歯学指導者養成事業」の一環で「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に、留学生の受け入れ校として本学の名前があがったわけでございます。

ミャンマーは隣のタイやカンボジアなどのASEAN 諸国の中でも歯科分野は特にレベルが低く、その充実を図るために日本から歯学教育者の養成を援助し、歯科医学の発展向上を図ろうというプロジェクトであります。

ミャンマーは、タイと比較しますと、国土・人口規模はほぼ同じですが、GDPは1/3にとどまっています。しかし、近年急速に民主化が進み、日本の企業や経済産業省も注

目し、近い将来に経済的にタイと同等になるのではないかと予想されております。経済的な発展とともにミャンマーの歯科医師数が著しく不足するということが政府の読みであります。

ミャンマーは歯科大学の数が2校、歯科



学生数は900人に対して、タイは9校、3,000人、歯科教員数は957人もいます。ミャンマーは教員数200人余りです。これだけ差があるというのは信じられないくらいですが、内戦などが長く続いたからかもわかりません。

このプログラムでは、ミャンマーから100名の若手歯科医師を受け入れて1年間20名ですが一つの大学で約4名を5年間、大学院の博士課程に入学させて、研究指導にあたる。同時に学部学生の教育にも従事させて、帰国後直ちに歯科医師養成の教育、あるいは歯科大学開設に取りかかる、と政府と話ができています。このプログラムの費用は文部科学省が国費で賄ってくれるということで、非常にいい話ではないかと思っています。



最後に、最終目標は博愛公益ですけれども、まずは八策の達成を昨年、一昨年に続いてさらに進めていかないといいません。

非常に駆け足でありますけれども、本学の置かれている状況と今後のプランについて申し述べさせてもらいました。これらを教授会あるいは理事会等で協議していただき、具体的な実行に移したいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

■ 平成26年度 事業計画

はじめに

平成25年は、大阪歯科大学創立100周年記念事業の掉尾を飾る100周年記念館が3月に竣工し、4月から第5・6学年の教育、勉学の拠点として利用が始まった。記念館の完成により第1～4学年は楠葉学舎で、第5・6学年は天満橋学舎において効率的に教育を行うことが可能となり、教員は存分に教育力を発揮し、学生は教員の熱意に応える形で徐々に学力向上の兆しを見せている。

平成26年度はこのよい流れを引き継ぎ、本学の教育研究の重点目標である「五つの力」（募集ブランド力の向上、学力の向上、教育力の向上、人間性涵養力への注力、教員人材育成力への注力）及び「三つの力」（学生の国際交流力増強、大学院力の増強、研究力の向上）を「八策」として強固にまとめた上で、目標達成を目指し諸改革を進めていきたい。具体的には、本学の最重要課題である歯科医師国家試験の合格率を上げるため、各学年の進級率アップに一層注力する。

一方、近年大学経営上、喫緊の最重要課題と位置付ける附属病院の財務改善については、平成24年から理事会の下に発足した「附属病院経営改善委員会」で毎月検討し、改善策の第一弾として平成25年5月から矯正歯科、小児歯科2科による土曜開院をスタートさせた。関係者が鋭意努力しているものの、現時点では土曜開院による改善効果が出るまでには至っていない。附属病院は経営母体も大きく、財務改善は一朝一夕に果たせるものではないが、本学の将来のため、この大命題を必ずや解決すべく各位の英知を結集して全力で取り組む決意である。

本学は本年度、第三者評価として機関別認証評価を大学基準協会を受審するほか、文部科学省の補助金事業の一環として実施される分野別歯学教育認証評価制度創設に向けたトライアルを受ける。評価の受審は、その準備等で一面大学に負担を強いるものであるが、これを契機に内部質保証の充実を図り八策達成の一助としたい。

平成26年、大阪歯科大学は大志胸に目標を目指し八策達成を期する。

■ 平成26年度事業計画 ■

I. 教学（学部教育）の改革

II. 大学院の改革

III. 教員人材の整備

IV. 附属病院の財務改革

V. 両専門学校の組織・人事改革

I. 教学－a（1学年～6学年）の改革

創立者の言葉「博愛公益」を基本にした建学の精神「歯科医学・医療に関する専門知識、技術の習得と共に、思いやりの心を涵養し、自らの選んだ道に深い使命感をもって、社会に対する奉仕的人生観を体得して、『博愛』と『公益』に努める」は、本学歯学教育の原点にして究極の目標である。学生には入学時の早い段階で、「大阪歯科大学の歩み」等の教材を用いて本学の歴史及び歯科教育者たちが歩んできた道を学ばせ、歯科医師になる目的を明確にして誇りと責任感を養う。その上で、八策に基づき具体的な歯科教育を進めていく。

1. 入試倍率

私立歯科大学を取り巻く状況が厳しい中、本学の平成24・25年度入試競争倍率（受験者数/合格者数）は2倍未満に低下しており、倍率2倍以上を回復することを第一の目標とする。オープンキャンパスの充実や入試広報の強化に一層取り組むとともに、国家試験の合格率を上げ受験生に選ばれる大学となるよう総力を結集する。国試合格率アップ→入試倍率アップ（アドミッション・ポリシーに適合する優れた入学者の確保）→更なる国試合格率アップ、の好循環を目指す。

2. 第1、第2学年学力

入学を認めた以上、大学は学生を一人前の歯科医師として社会に送り出す責任を持つ。入学時の学力の個人差を埋めるため、とくに推薦入学者には入学前に準備教育を施し、初年次教育に注力する。根気よく大学での学習スタイルを身につけさせ、6年間支障なく勉学が続けられるよう支援、指導する。

3. 新カリキュラム3年目

平成24年度第1学年から導入された新カリキュラム2012は、科目別テスト、学年末総括テスト共合格が進級の条件であり、今年度は開始3年目を迎える。

4. CBT対策

全国共通共用試験であるCBTは臨床に入る前の第一次国家試験といえる。試験結果は学校単位で評価されるため、CBT本試験に合格できる学力を4年間で養成し、最終的な歯科医師国家試験につなげていく。また、合格基準を70%とし、成績が低迷する学生に対しては、教育アドバイザーによる少人数学習で学力を補う。

5. 学士対策

学士試験I、IIの成績は国家試験に直接反映されるため、本試験合格を目指し平成25年度から学士IIの合格基準を70%に引き上げた（必修問題は80%）。学年指導教授、教育アドバイザー、助言教員、特別アドバイザー、学習サポーター、ティーチングアシスタント等を増員し、総動員態勢で学習指導に当たる。

I. 教学－b（新しい評価・試験の導入）

上記の教学改革をさらに補強するため、近年具体的に以下の項目に取り組み、弱点の強化に努めている。これらを今年度も継続して行っていく。

1. 第1学年から欠席・遅刻の厳密点検

学業成績が低迷している学生の多くが早起きを苦手とし欠席・遅刻が常習化しつつあることから、優れた医療人の基本となる規律正しい生活を第1学年から学生一人ひとりが身につけられるよう、欠席・遅刻を厳格に点検する。

2. 新カリキュラム開始3年目

3. 70点（%）合否基準の実施

平成24年度に学内の全試験の合格基準を65%に引き上げたのに続いて、昨年度はCBT、学士試験Ⅱの合否をさらに70%（学士Ⅱの必修問題は80%）に改め実施している。

4. 全国模擬試験の導入

国家試験対策として第6学年に本学指定の模擬試験（全科目）を計3回受験させる。

5. 教育アドバイザーによる少人数クラス設置（全学年）、学年指導教授、助言教員、特別アドバイザー、TA、学習サポーター（平成25年10月24日規則制定）を新規設置

6. 第5学年の進級試験を5回実施

7. 「第6学年教務部委員会」の設置

6年生全員の成績分析を行う。

8. 「既卒者教務部委員会」の設置

既卒者の国試合格を支援すべく、学費免除で個別指導や成績分析を行う。

II. 大学院の改革

教育研究の重点目標・八策の中で「大学院力の増強」と「研究力の向上」を平成23年から目標として掲げている。大学院を魅力あるものにし、入学希望者を増大させることが研究の活性化につながる。まずは毎年安定した入学定員の充足に努める。

1. 大学院生の入学倍増計画

これまで、教育研究者としての資質をもつ学部生に大学院進学を推奨する、大学院准教授による院生の指導を認める、平成25年度入試二次募集から社会的需要の高い口腔インプラント学を専攻科目に追加するなど、入学を増やす取り組みを行ってきた。これらに加えて、本年度は大学院の入試広報も強化していきたい。さらに、従来院生の在籍に偏りが目立った歯科基礎系・歯科臨床系の専攻を平成27年度から一本化するため、文部科学省への届出準備を進める。

2. 大学院教員の増強

大学院生を増やし、研究力を向上させるためにはその指導態勢も充実させなければならない。FD研修の定期開催や、大学院入学生を呼べる研究力、教育力のある教員の任用を検討する。

3. 新設専攻科の拡大、社会人院生の拡大

平成24年度の口腔インプラント学新設を皮切りに、社会的要請等を考慮し今後も引き続き障がい者歯科学、歯科法医学等新たな専攻科の拡大につき具体的に検討する。社会人大学院生の受入れ態勢をできるだけ早く整備した上で積極的に募集し、将来の研究者・教育者としての道を開く。

4. 外国人院生・留学受入れ

入学定員を満たすためには毎年一定数の留学生を確保することが重要であり、海外提携校に対し本学大学院への留学の働きかけを強化するとともに、外国人留学生受入れ態勢をさらに充実させていく。

また、本学は文部科学省が公募する平成25年度「国費外国人留学生の優先配置を行うプログラム」に、東京医科歯科大学を代表校とする5大学の共同事業として応募した。本プログラムはミャンマー連邦共和国に対する歯学指導者養成事業で、ミャンマーの若手医師を大学院に受け入れて（1大学2名×5年間）研究を指導し、同時に学部教育にも従事させ、帰国後、母国で歯科医師養成の教育に取り組めるようにするというものである。本事業が採択されミャンマーからの留学生を受入れることで、大学院が活性化することを期待している。

5. 修士課程（衛生士、技工士）の新設

近年、主に歯科衛生士、歯科技工士等を対象にした修士課程の新設について検討を重ねた結果、平成27年度開設を学内決定し、本年度は文科省への認可申請、募集開始等開設に向け最終準備段階に入る。

III. 教員人材の整備

教育研究の重点目標・八策の一つ、「教員人材育成力への注力」として、これまで①教員職階ごとの任用基準の明確化、②（一般教育系、基礎系、臨床系、病院）教員資格の一本化、③教育研究に優れた教員の専任教授任用（講座・教室外）、④海外留学経験を有する大学院修了者の助教特別採用、⑤教員評価や学生による授業評価の実施等、諸規程を整備し改革を進めてきた。

ただ、今後8年間に専任教授を含む23名もの教授が定年等により退職を迎え欠員が生じることになるため、諸規程の実効性を高め弾力的に運用するとともに、次の取り組みを行う。

1. 教員評価

教員評価については平成21年度に導入以来、PDCAサイクルがよく機能し、昨年度は「教員評価実施規程」に基づき教育、研究、臨床活動のうち各教員の得意分野を積極的に評価する新たな方向性を示した。同時に、昨

年中頃から新授業評価表を採り入れ、CBT や学士の本試験に合格する授業、留年させない授業への改善を教員各人に促し「教育力の向上」につなげるとともに、優れた教員の発掘に役立っている。本年度はこれらを本格実施し、「教員人材育成力への注力」を増進する。

また、平成 24 年度から順次任期制教員の再任用審査の時期を迎えており、教員の流動性も次第に活発になってきている。再任用の審査は総務部委員会で慎重に行われ、資格基準等の見直しも継続審議されている。両者を軸に教員力の底上げを図っていく。

2. 優れた大学教授の選出

定年等により平成 26、27 年度に大学教授の欠員が急増（計 9 名）するのを見越し、早い時期から優秀な人材の補充、任用を検討する。

3. 優れた専任教授・大学院教授

昨年度は障がい者歯科及び歯科審美学室が設置され、それぞれ専任教授 1 名が誕生した。今年度は大学院の専攻科新設等も勘案しつつ、優秀な専任教授、大学院教授の新規任用を拡大していく。

4. 大学院生・ポスドクの海外留学支援

大学院生やポスドクトラルフェロー等若手研究者の海外留学をさらに奨励、支援し、海外留学経験者特別採用制度の運用拡充を目指す。

5. 優れた教育アドバイザー（教員）

留年生や国試不合格者からはよりきめ細かに学習指導する優れた教育アドバイザーの増員が要望されており、これら教員の任用拡大を検討する。

IV. 附属病院の財務改革

本学において附属病院の財務改善が喫緊の最重要課題であることは、過去数年変わりなく、この大命題を解決すべく平成 24 年度、理事会の下に「附属病院経営改善委員会」を設置し毎月検討を重ねているところである。その中で、第一の改善策として土曜開院の実施を決め、平成 25 年 5 月 11 日から開始した。本年度は同委員会で、土曜開院スタート 1 年の評価を行い、収支両面からその他の方策も企画立案し改革を主導する中で、病院の財務改善の光明を見出した。

■ 寄贈

下記の通り寄贈を受けました。心より感謝いたします。

・大阪歯科大学第 62 回卒業生 | 卒業を記念して | 創立 100 周年記念館 3 階御手洗(男女)ハンドドライヤー（平成 26 年 3 月 7 日）

1. 医療収入と患者数の指標

毎月、医療収入と患者数の指標でもって各科の診療実績を注視しながら改善点はないか検討を加えていく。

2. 土曜日開院の拡大化

矯正歯科及び小児歯科の 2 科を中心にスタートした土曜開院であるが、開始 1 年目の評価を経て、収支の状況を見極めた上で拡大路線へ進めるか検討する。

3. 各科ごとの収支改善

費用対効果を考慮し、診療科ごとの収支を月次で丹念に追いながら、各科の当事者意識を高め収支改善につなげていく。

4. 臨床実習フロアの統一

第 5 学年の臨床実習と研修歯科医の卒後研修フロアの一体化構想であり、病院全体を活気づけるプランとして期待が高まる。極力費用を抑えて実現すべく具体的な検討に入る。

5. 病院運営貢献者への顕彰・報奨

上記 1. から 4. を実行していくのと同時に、病院運営貢献者への顕彰や報奨を考慮する。

V. 両専門学校の組織・人事改革

両専門学校の改革については、理事会の下に「専門学校の大学・短大化に関する検討委員会」を設置し、大学を含めた総合的な歯科教育機関という枠組みの中で引き続き検討していく。両専門学校を平成 27 年度開設予定の大学院修士課程へ接続する方向で体制を整備していく。

1. 歯科技工士専門学校

学生数が減少傾向にあり、平成 24 年度に入学定員を削減したが、定員割れは依然として解消されていない。卒業後のニーズを考慮し、インプラント技工学、CAD/CAM 技工学を全面にアピールするなど募集力改善に全力を挙げて取り組む。また、卒業生には開設予定の本学大学院修士課程への進学を奨励していきたい。

2. 歯科衛生士専門学校

3 年制移行後近年は順調に定員が充足しているが、さらに入試倍率をアップさせ、募集人員を拡大する方向へ進めていく。また、歯科技工士と同様に大学院修士課程への進学を奨励し、将来の教員への道を開く。

■ 人事

昇 任

歯科審美学室	専任教授	末瀬 一彦	H.26.1.1 付
総合診療・診断科	専任教授	小出 武	H.26.3.1 付

特別昇任

口腔治療学講座	准教授	畠 銀一郎	
高齢者歯科学講座	准教授	伊崎 克弥	
	以上		H.26.3.31 付

職員採用

附属病院	看護師	谷 貴末枝	H.26.1.1 付
------	-----	-------	------------

定年退職

口腔治療学講座	主任教授	林 宏行	
総合診療・診断科	准教授	松本 晃一	
口腔治療学講座	准教授	畠 銀一郎	
歯科技工士専門学校	教務主任	松原 正治	
専門学校事務室	専門学校事務長	西堤 京子	
附属病院	歯科衛生士長	宮本 美千子	
総務課人権担当	主任	野中 登貴男	
附属病院	歯科技工士	菊田 茂	H.26.3.31 付
	以上		

依願退職

高齢者歯科学講座	助教	田中 栄士	H.26.2.28 付
歯科麻酔学講座	主任教授	小谷 順一郎	
歯科理工学講座	主任教授	武田 昭二	

高齢者歯科学講座	准教授	伊崎 克弥	
小児歯科学講座	講師	竹安 正治	
歯科麻酔学講座	講師	讃岐 拓郎	
物理学教室	講師	一宮 正義	
歯科保存学講座	助教	西田 尚敬	
口腔外科学第一講座	助教	佐野 寿哉	
経理課	事務職員	松本 大樹	
大学庶務課記念館事務室	事務職員	斎藤 俊司	
附属病院	薬剤師	岸本 篤子	
附属病院	歯科衛生士	栗山 朱実	
	以上		H.26.3.31 付

任期満了退職

生物学教室	准教授	檜枝 洋記	
歯科矯正学講座	講師	飯田 拓二	
口腔解剖学講座	助教	安 春英	
薬理学講座	助教	大谷 政博	
欠損歯列補綴咬合学講座	助教	土居 聖	
小児歯科学講座	助教	永田 幸子	
	以上		H.26.3.31 付

再雇用任期満了退職

総務課牧野事務室	事務職員	仲宗根 幸男	
医事課	事務職員	岡本 安子	
附属病院	歯科技工士	加地 公夫	
	以上		H.26.3.31 付

講師(非常勤)委嘱

大学院歯学研究科	口腔インプラント学	西下 直希	H.26.1.1 付
----------	-----------	-------	------------

■ あとがき

附属病院本館14階にあるレストラン、プラザ14（フォーティーン）は、病院の患者さんやお見舞いの方、地域の皆さまに親しまれるレストランであると同時に、天満橋学舎の学内食堂として、毎日お昼時になると学生や教職員で賑わっています。

一番人気のからあげ定食のほか、バリエーション豊かな日替わり定食から軽食まで幅広いメニューがそろっており、ご飯はお代わり自由、雑穀米やお漬物なども用意されていて、お腹を空かせた学生の毎日のエネルギーになっています。

厨房では、下拵えから配膳の準備まで、余念なくスタンバイされ、オーダーが入ると同時に見事な手さばきで料理を仕上げている様子、お待たせすることなくできたてのランチが運ばれていきます。

支配人の日高氏は「毎日口にするものこそ本当に美味しいものを」と、お米やコーヒー豆などの産地にもこだわり、食べた人が心も体も満足できるよう、隅々にまで心を配っています。「勉強や仕事の忙しさから、ホッと一息、解放されるひとときを過ごせるよう、これからもがんばります！」と笑顔で見送ってくださいました。



美味しいお料理と
淹れたてのコーヒー



絶好のロケーションもご馳走の一部です



美味しいご飯と
みなさんの温かいおもてなしに
お腹も心も大満足でした！
ありがとうございました！

大阪歯科大学広報 第170号

発行日 平成26年3月31日
編集発行 大阪歯科大学広報委員会
〒573-1121
枚方市楠葉花園町8-1
TEL 072-864-3111
